

山形県埋蔵文化財調査報告書第19集

# 分布調査報告書(6)

山形西部地区関係遺跡

1 9 7 9

山形県教育委員会

# 分布調査報告書 ( 6 )

山形西部地区関係遺跡

昭和54年 3月

# 序

本報告書は、昭和 53 年度に実施した、国営農地開発事業・山形西部地区に関する当該地域の埋蔵文化財包蔵地分布調査結果をまとめたものであります。

開発計画によれば、寒河江市から山形市にわたる山形盆地西部の出羽丘陵一帯を農地として開発し土地改良を行いダム等を建設する大規模開発であります。このたび、その地域内に点在する埋蔵文化財包蔵地の所在と範囲を確認するための分布調査を実施いたしました。

国営農地開発事業は、現在のところ、計画・調査の段階であります。山形盆地西部の丘陵一帯は、今後、都市部の後背地として、種々の開発が予想される地域であります。

近年これからの大規模な開発事業と埋蔵文化財とのかかわりは増加の傾向にあり、県民の福祉向上を目的とする諸開発事業と、幾千年を経た先人の生活跡である埋蔵文化財の保護との間には、多くの問題をかかえており、県教育委員会においてはこの間の調整に鋭意努力を続けております。

本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を高める一助になれば幸いと存じます。本調査に御協力いただいた関係各位並びに各市町教育委員会に心から感謝を申し上げます。

昭和 54 年 3 月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

# 例　　言

1. 本報告書は、山形県教育委員会が昭和 53 年に実施した、山形西部地区関係遺跡の分布調査報告書である。
2. 調査は、山形県教育庁文化課、川崎利夫・佐々木洋治・野尻侃・茨木光裕・佐藤義信の 5 名が担当し、庄内哲氏より御協力をいただいた。
3. 本報告書の執筆は、川崎利夫・茨木光裕が担当し、編集は茨木光裕があたった。
4. 遺跡の分布図は、1 万分の 1 の当該市町管内を市用し、一部 2 万 5 千の 1・地形図を用いた。
5. 遺跡の範囲は、遺物の表採集から確認された地域を図示した。範囲の明らかでない遺跡については、便宜的に円で示してある。

# 目　　次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	1
II	立地と環境	
1	位置及び地勢	2
2	歴史的環境	2
III	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡地名表	4
IV	山形西部地区重要遺跡地名表	16
V	まとめ	25

## 挿 図 目 次

第1図	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡位置図	3
第2図	玉虫沼古窯跡出土遺物	17
第3図	経塚出土遺物（1）	19
第4図	経塚出土遺物（2）	21
第5図	坊主窪・壇の森古墳群地形図	24
第6図	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（1）	27
第7図	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（2）	28
第8図	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（3）	29
第9図	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（4）	29
第10図	国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（5）	30

## 図 版 目 次

図版 1	滝一2古窯跡近景	滝経塚近景
図版 2	山楯遺跡近景	西光山館跡近景
図版 3	坊主窪古墳群近景	安國寺裏山経塚遠景
図版 4	根際の場遺跡近景	壇の森古墳墓遠景
図版 5	要害墳墓近景	小針生遺跡近景
図版 6	楯山古墳近景	楯山館跡遠景
図版 7	菜沢遺跡近景	薺田石遺跡近景
図版 8	案内所入遺跡近景	畠谷城跡遠景
図版 9	鎧坂濠跡群遠景	村木沢古墳群遠景
図版 10	村木沢古墳群近景	芳沢経塚遠景
図版 11	芳沢経塚近景	上平遺跡近景
図版 12	玉虫沼古窯跡・上平遺跡・里道遺跡・西光山館跡、出土遺物	
図版 13	滝経塚出土経巻	薺田石遺跡出土遺物
図版 14	経塚出土遺物	

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

昭和 51 年 8 月 6 日付で、山形県教育委員会教育長あてに東北農政局計画部長から「国営農地開発事業調査・山形西部地域の埋蔵文化財の処理について」なる文書が提出された。その後、東北農政局の担当官との協議も進められていた。その開発計画は、中山町・山辺町・山形市・寒河江市の 2 市 2 町にわたる出羽丘陵の一部を農地として開発し土地改良を行ないダム等を建設する大規模開発である。この事業については、計画・調査の段階にとどまりまだ実施するまでには至っていないが、事業計画策定以前にあたって文化財保護の立場から対処する必要がある。今後、この地域については、農地開発や山間の集落を結ぶ道路建設、林道開発、草地造成等の各種開発が近い将来に行なわれることは必定と考えられる。

従って、文化財保護の立場から早急に今後予想される開発に対処するため、今年度この地域について埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査を実施した。

## 2 調査の経過

分布調査は、山形教育委員会が主体となり、昭和 53 年 9 月 19 日～10 月 6 日までの実質 13 日にわたりて実施した。調査対象地域は、山形市・山辺町・中山町と寒河江市の一部、2 市 2 町にわたる約 2000 ha の範囲である。

調査にあたっては、大縮尺の地図をもとに各遺跡を踏査し可能な限り遺跡の範囲を把握し記入することに主眼をおいた。また遺物の所蔵者にあたり主要な遺物についての記録作成を実施した。しかし、調査地域が山間部であるため山林・荒地等が多く遺物の散布範囲がつかめず範囲を明確にし難いものがあった。そのような遺跡については便宜的に円で示してある。調査対象地域が広域にわたるため、遺跡を山形市・山辺町西山麓地域、中山町西部山麓地域、山辺町畠谷周辺、同大藏周辺の 4 ブロックに分けて遺跡の踏査を行った。

その結果、対象地象域内に 57 の遺跡（埋蔵文化財包地）が確認された。時期的には縄文時代から奈良・平安時代にわたり中世・近世の城館跡なども多く分布する。また丘陵の山麓部付近に遺跡が多く経塚・古墳群が密集している。これらは、平野部に所在する遺跡との関連を考える上で重要な遺跡である。

主要な遺跡については第 VI 章で後述するが、調査地域が山間部であるため未発見の遺跡もあると考えられ、今後さらに遺跡数は増加すると考えられることを付記しておく。

## II 立地と環境

### 1 位置及び地勢

分布調査を行った地域は、山形盆地の西部で出羽丘陵地帯の一部に含まれる。南北15km、東西6kmに及ぶ範囲であり、その中に鳥海山(標高531m)、東黒森山(776m)、高森山(783.6m)などの山を含むが、概ね標高200m～400mの地域が多く山間部の小盆地や河川に沿って小集落が散在している。

山形盆地の南西端にのぞむこの地域は、巨視的には出羽丘陵の一部をしめるが、白鷹山(986m)を中心とする白鷹丘陵の北半部を占め第三紀の凝灰岩と頁岩が互層をなして所々に露頭を見せており。この地域には大きな河川ではなく須川に流下する小河川や沢が丘陵部を横断して東流し、それに沿って道路や集落が発達している。また白鷹山の北麓には、畠谷大沼、荒沼、玉虫沼などの小湖沼が多く、これらの湖沼群は自然地形を利用し後世に灌漑用水として開かれたものである。概ね奥羽山脈にみられるような急峻で深い山地ではなく、なだらかな丘陵が連なり、最近これらの地形に適するような果樹地帯がひろがりを見せている。

### 2 歴史的環境

この地域は、山間の河川流域の台地に繩文時代の遺跡が多く分布する。比較的小規模な遺跡が多いが白鷹北麓の火山泥流上に向坂、薬田石などの良好な遺跡がある。先土器時代の遺物は、まだ未発見であるが今後注意される必要がある。

山形盆地の須川西部地域は、早くから農耕文化が定着した地域で、菅沢2号墳、大之越古墳など比較的古式の古墳が分布する。平野部には4世紀から10世紀頃までの集落が多く分布し中山町柳沢、山辺町、山形市西部地域一帯には条里制遺構が認められる。これらの背後を占めるこの地域には、祭祀遺跡、須恵器古窯跡等があり、古代の農業生産を支える後背地としての役割を果した地域である。また、この地域の南部は、藤原頼長の荘園として「台記」の仁平3年(1153年)の条に「大曾根莊」として記載されている。さらに貞観8年(866年)定額寺に列せられた瑜伽寺は、滝の平にあったと云われ、その凝定地も存在し、この地域の山間部もかつては真言宗を中心とした仏教文化の定着した場所であった。

置賜と村山を結ぶ孤越街道もこの地にあり、戦国期から関ヶ原まで最上氏の前哨線としての館跡が、畠谷城をはじめとして多く残っている。



第1図 国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡位置図

### III 国 営 農 地 開 発 事 業

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地目	立 地
1	経 塚	平 壇 経 塚	寒河江市大字平壇・経塚山	室 町	山 林	山 頂
2	窯 跡	滝 2	中山町大字土橋字滝501・506-1	平 安	烟	山 龍
3	集落跡	滝 3	中山町大字土橋字滝505-2	平 安	烟	山 龍
4	経 塚	滝 経 塚	中山町大字土字滝・豊田山	鎌 倉	山 林	山 腹
5	散布地	岩 谷	中山町大字金沢字天沼1885-14	繩 文	山 林	山 腹
6	散布地	山 標	中山町大字柳沢字山標780	繩 文 平 安	山 林	山 腹
7	城館跡	谷 木 城	中山町大字柳沢字山標1266-2	室 町	烟	山 頂
8	集落跡	庚 中 山	中山町大字金沢字庚中山	弥 生		
9	散布地	遷 根	山辺町大字北山字遷根1707	繩 文	宅地 烟	山 腹

## 山形西部地区関係遺跡地名表

遺 跡 概 要	出 土 遺 物	備 考	地図番号
平塙寺の背後、経塚山の山頂より出土。発見は明治40年頃、その際、2個の甕が出土したと云う。	珠洲系外容器	注1 №434	
丘陵から平野部へ移る山麓・緩斜面に立地。窯本体は道路工事により半分を削られ断面に露出している。	須恵器	注1 №411 道路工事により一部破壊	6-2
窯跡の南方約20m。須恵器・土師器片が表採される。本遺跡の北方約150m付近にも遺物散布地有り。	須恵器 土師器(平安)	注1 №412	6-3
豊田山(標高175m)山頂より東へのびる尾根上に立地。昭和52年9月発見。	珠洲系外容器 陶製経筒・銅製経筒・写経(紙本経)	新規 土取りにより発見・破壊。	6-4
岩谷部落の北方1,000 m。沢の右岸・南面する緩斜面に立地、現在杉林で表採出来ず。		注1 №402	6-5
柳沢から岩谷へ至る道路の中間。谷合の急斜面に立地。出土遺物も僅少で遺跡の詳細は不明。	繩文式土器 土師器(平安)	注1 №408	6-6
柳沢部落の南西・標高246mの山頂部に立地。本丸跡が山頂平坦部にあり室町末期の築城と伝えられる。		注1 №406	6-7
遺跡の所在が不明確。今回の調査で確認できず。		注1 №403	6-8
蓮根部落の南方・西面する緩斜面に立地。宅地で表採出来ず。	繩文式土器(中期) フレーク	注1 №360	

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目	立地
10	散布地 館跡	西光山館跡	山辺町大字大寺字西光山	繩文 中世	山林 畠	台地
11	古墳	坊主窪古墳群	山辺町大字大寺字坊主窪	古墳 奈良	山林 畠	丘陵
12	古墳	壇の山古墳群	山辺町大字大寺字熊沢	古墳 奈良	山林 畠	丘陵
13	経塚	安国寺裏山 経塚	山辺町大字大寺	室町	山林	山頂
14	館跡	館の峯館跡	山辺町大字北山字湯舟・館の峯	安土 江戸	山林	山腹
15	散布地	金城	山辺町大字北山字軽井沢3105	繩文	山林 畠	山腹
16	集落跡	杉下	山辺町大字杉下	繩文 平安	畠	台地
17	集落跡	諏訪原	山辺町大字大寺字諏訪原	平安 鎌倉	畠	山麓
18	経塚	普広寺山経塚	山辺町大字根際字芳	平安末 ～鎌倉	山林	山頂
19	経塚	普広寺境内 経塚	山辺町大字根際字芳・普広寺境内	室町	墓地	山麓

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
比高約7mの北へのびる舌状台地上に立地。台地上は平坦であるが巾が狭い。北端部より石鎚・フレーク表採。	石鎚 フレーク	注1 №352 北端部、道路工事で破壊	6-10
丘陵の山頂部から東斜平に分布。現存するのは円墳4基位。規模は径約15m・高さ約1.5m程。	管玉 勾玉	注1 №351	6-11
平野部に突出した丘陵の台地上に立地。	管玉	注1 №350	6-12
安国寺裏山(標高224m)、山頂より出土。径約6m、高さ約50cmの円墳状土壙より出土したと云う。	陶製経筒 陶製蓋器	注1 №349	6-13
湯舟部落の南東方、館の峯より派生する尾根上の平坦面(標高400m)に立地。		注1 №359	
蛭井沢部落の南方約400mに位置する。鳥海山(標高531m)山腹の緩斜面に立地する。今回は現地踏査せず。	石鎚 フレーク	注1 №358	
杉下部落の西方約300m、東へのびる舌状台地に立地。遺物は土師器片が若干散布。	石鎚 土師器(平安)	注1 №357	7-16
丘陵から平野部へ移行する傾斜変換線付近の緩斜面に立地。今回は現地踏査せず。		注1 №348	7-17
普広寺裏山(標高230m)、山頂より出土。発見は昭和8年頃で出土状況は不明である。	陶製外容器 陶製経筒	注1 №390	7-18
普広寺本堂の北側、市村家墓地前より多量の経石が出土。	一字一石経	注1 №389	7-19

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地 目	立 地
20	集落跡	根際的場	山辺町大字根際字的場	縄文	畑	台地
21	墳 墓	壇の森墳墓	山辺町大字大藪字前方	室 町	墓地	台地
22	散布地	前 方 A	山辺町大字大藪字前方	縄文	山林 墓地	丘 陵
23	散布地	前 方 B	山辺町大字大藪字前方	縄文	畑	丘 陵
24	館 跡	蟹沢館跡	山辺町大字大藪字東	安 土	水田	山 腹
25	集落跡	荒 谷	山辺町大字大藪字荒谷・三本松	縄文	畑	丘 陵
26	館 跡	荒 谷 館 跡	山辺町大字大藪字荒谷・たての山	安 土 江 戸	山林	丘 陵
27	窯 跡	玉虫沼古窯跡 群	山辺町大字根際字能中	平 安	畑 荒地	丘 陵 斜 面
28	散布地	玉虫沼 A	山辺町大字根際字能中	縄文	畑	丘 陵
29	散布地	玉虫沼 B	山辺町大字根際字能中	平 安	草地	湖 岸

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
東へはり出す台地の先端部に立地。範囲は約30×40m位である。	縄文式土器 フレーク	注1 No388	7-20
盆地へ張り出す舌状台地の先端部に立地。発見は昭和18年頃、墓地造設の際削平されて破壊。	埴輪土器 石製容器	注1 No365	
前方部落背後の丘陵、南面する緩斜面に立地。山林と墓地になっており表採出来ず。	石窓 フレーク	注1 No367	8-22
前方A遺跡の南方約200m、丘陵の先端部に立地。遺物は丘陵上の平坦面、南斜面にフレークが散布する。	石窓 フレーク	注1 No367	8-23
荒谷部落の北方約300m。以前、二重の空濠があったと云うが現存しない。		注1 No364	8-24
荒谷部落の南西、丘陵台地上にある。現在タバコ烟になっており削平され一部破壊。	縄文式土器(中期) 打斧・石窓	注1 No362	8-25
前方部落へ突き出した丘陵の台地上(標高486m)にある。二重の空濠がめぐる。		注1 No363	8-26
玉虫沼北岸の丘陵、北斜面に立地。100×200m位の範囲。数十基の窯跡が存在するものと考えられる。	須恵器	注1 No383	8-27
玉虫沼の東岸の丘陵に立地。一部遊歩道建設に併なう土取りのため破壊。	縄文式土器(中期) 石窓	注1 No384	8-28
玉虫沼の東岸に位置する。湖岸を一周する遊歩道建設に併ない破壊。今回の調査では表採出来ず。	須恵器 陶製錠	注1 No385	8-29

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地 目	立 地
30	墳 墓	要害墳墓	山辺町大字要害	鎌倉	山林	丘陵
31	散布地	小針生	山辺町大字北作字小針生	縄文	烟荒地	台地
32	古 墳	楯山古墳	山辺町大字北作字楯山1150	奈良	烟	台地
33	散布地	沢 下	山辺町大字北作字沢下	縄文	水田	台地
34	館 跡	楯山館跡	山辺町大字北作字楯山	室町	山	
35	集落跡	築 沢	山辺町大字築沢字沢下	縄文	烟	丘陵
36	集落跡	藁 田 石	山辺町大字北作字藁田石	縄文 弥生 古墳	烟 水田	丘陵 台地
37	散布地	案 内 所 入	山辺町大字畠谷字案内所	平安	烟	山麓
38	城館跡	畠 谷 城 跡	山辺町大字畠谷・館山	安土 江戸	山林	独立丘
39	集落跡	西 の 原	山辺町大字畠谷字西の原	縄文	烟 山林	丘陵

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
丘陵東斜面に立地。2基の円墳状墳丘があり規模は径約15m、高さ約1.5mで周溝状の凹みがめぐる。		注1 №386 古墳の可能性有り。	7-30
丘陵から平坦部へ移行する傾斜変換線付近の小台地に立地。範囲は50×50m程。	石器 フレーク	注1 №372	
舌状に張り出す台地先端部にある。墳丘は径約20m、高さ約1mの円墳。箱型石棺一基が発見され骨片出土。	骨片	注1 №369	
插山古墳の南方約200m、台地上の平坦部に立地。開田により削平され一部破壊。	縄文式土器(中期)	注1 №368	9-33
篠沢部落背後の樅山(標高420m)山頂に立地する。山頂は平坦で平坦部を段が3段、認められる。		注1 №370	9-34
樅山より南方へのびる丘陵の先端部にあり、クワ畑になっている。篠沢部落の背後に位置する。	縄文式土器(中期)	注1 №371	9-35
南方へのびる丘陵の台地先端部に立地する。範囲は50×50m程。北方約200mにもう一地点有り。	縄文式土器(中期) 磨斧・打斧 弥生式土器・土師器	注1 №373	9-36
畠谷盆地の北辺、丘陵から平地への変換線付近にあり緩斜面。今回は表採できず。	土師器	注1 №374	9-37
館山(549m)に所在。山頂は平坦で周囲に空濠がめぐる。最上家臣、江口五兵衛の居城。館の下にも空濠あり。		注1 №377	9-38
丘陵の西面する緩斜面及び山麓台地上に立地。範囲は約50×40m程。	縄文式土器(中期)	注1 №375	9-39

遺跡番号	種別	遺跡名	所 在 地	時 期	地 目	立 地
40	館 跡	造坂源跡群	山辺町大字畠谷字一本木	江 戸	山林	山 腹
41	墳 墓	念仏壇墳墓	山辺町大字畠谷字念仏壇	江 戸	山林	山 腹
42	散布地	大 沼 B	山辺町大字畠谷	繩 文	水田 宅地	山 麓
43	散布地	大 沼 A	山辺町大字畠谷字板橋1933-28	繩 文	畑 水田	山 麓
44	散布地	五 番 酒	山辺町大字畠谷字獄原・五番酒 2402-65	繩 文	畑	台 地
45	集落跡	向 坂	山辺町大字畠谷字獄原・向坂	繩 文	畑 水田	山 麓
46	集落跡	出 塩	山形市大字村木沢字出塩	繩 文	畑	山 麓
47	集落跡	愛 宕 山	山形市大字村木沢字愛宕山	平 安	畑	山 麓
48	古 墳	村木沢古墳 群	山形市大字村木沢字北谷地6196	古 墳	畑	丘 腰
49	経 塚	芳沢経塚	山形市大字芳沢	鎌 倉	山林 畑	山 頂

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
西黒森山の北方、東斜面に所々に空濠跡がある。慶長5年、最上・上杉合戦の際の空濠跡と推定される。		注1 №376	9-40
東黒森山の山麓、道路脇にある。以前2基あったが1基のみ現存。径約8m、高さ約1.5m程の円墳。		注1 №378	9-41
大沼の南方丘陵の山麓にあり範囲は30×30m程。道路工事・開田等により大部分破壊。	縄文式土器(中期)	注1 №382	9-42
大沼B遺跡の東方約500m。丘陵山麓の緩斜面に立地。一部畑地造成によって削平されている。	縄文式土器(中期)	注1 №381	10-43
獄原部落の北方約200m、北へ張り出す台地上に立地。付近に清水がある。	石鎌	注1 №379	
五番酒遺跡の東方約400m、白鷹山々麓の緩斜面に立地。開田に併ない一部削平されている。	縄文式土器(中期) 石鎌・石匕・石錐 土製耳飾	注1 №380 昭和35年発掘	
丘陵から平野部へ移行する傾斜変換線付近の緩斜面に立地する。今回は現地踏査せず。	磨斧	注1 №120	
丘陵山麓の緩斜面に立地。今回は現地踏査せず。	須恵器 土師器(平安)	注1 №119	
丘陵の山頂から東斜面に数基の円墳がある。規模は径約10m、高さ約1.5m。石棺の石材が所々に散在している。		注1 №118	10-48
芳沢部落北方の山丘(標高319m)の山頂部より出土。畑地開墾の際発見。	珠洲系外容器	新規	10-49

遺跡番号	種別	遺跡名	所在地	時期	地目	立地
50	集落跡	上平	山形市大字上平	繩文	畠 社地	台地
51	寺院跡	能中	山辺町大字根際字能中	平安 鎌倉	畠 山林	丘陵
52	集落跡 祭祀跡	里道A	山形市大字滝の平字里道	繩文 弥生 古墳 平	畠	丘陵
53	寺院跡	里道B	山形市大字滝の平字里道	平安 鎌倉	畠	丘陵
54	館跡	滝の平館跡	山形市大字滝の平		宅地 水田	山麓
55	散布地	南八森	山形市大字滝の平・南八森	平安	山林 畠	山麓
56	散布地	雀打A	山形市大字下反田字雀打	繩文	畠 山林	山麓
57	祭祀跡	雀打B	山形市大字下反田字雀打	古墳	畠 山林	山麓

遺跡概要	出土遺物	備考	地図番号
上平部落の東方約100m、南方へ張り出す舌状台地先端部に立地。範囲は20×30m位に遺物が散布。	縄文式土器(前期) 石鎌・フレーク	注1 №116 注1の地点記載誤り。	10-50
玉虫沼古窯跡の北方で隣接する。なだらかな丘陵で礎石と思われる石材が点々と認められる。瑜伽寺の凝定地。	土師器(平安) 須恵器 中世陶器	新規	8-51
龍の平部落北方の丘陵台地に立地。範囲は約200m四方。出土遺物も多く長時期にわたる複合遺跡。	縄文式土器・石鎌・石甕・弥生式土器・アメリカ式石鎌・土師器(古墳)・有孔円板・須恵器	新規	10-52
里道A遺跡の西方約50m。以前より瑜伽寺の凝定地とされていた所。畑地造成時に礎石と思われる石材を発見。		新規	10-53
龍の平部落内にあり背後に丘陵をひかえる山麓にある。内濠がめぐり、南方の水田に空濠跡がある。		新規	10-54
八森山の南山麓にあり緩斜面に立地。内黒土師器、須恵器等が表採されている。	土師器(平安) 須恵器	新規	10-55
丘陵山麓のせまい緩斜面に立地する。県道の南側に位置する。	縄文式土器 石鎌・石甕	新規	10-56
省打A遺跡の南方約150m。以前、円形の土壇があり、円形の石組・木炭等が検出された。付近より勾玉出土。	勾玉	新規	10-57

## IV 山形西部地区重要遺跡概要

### 1 玉虫沼古窯跡群

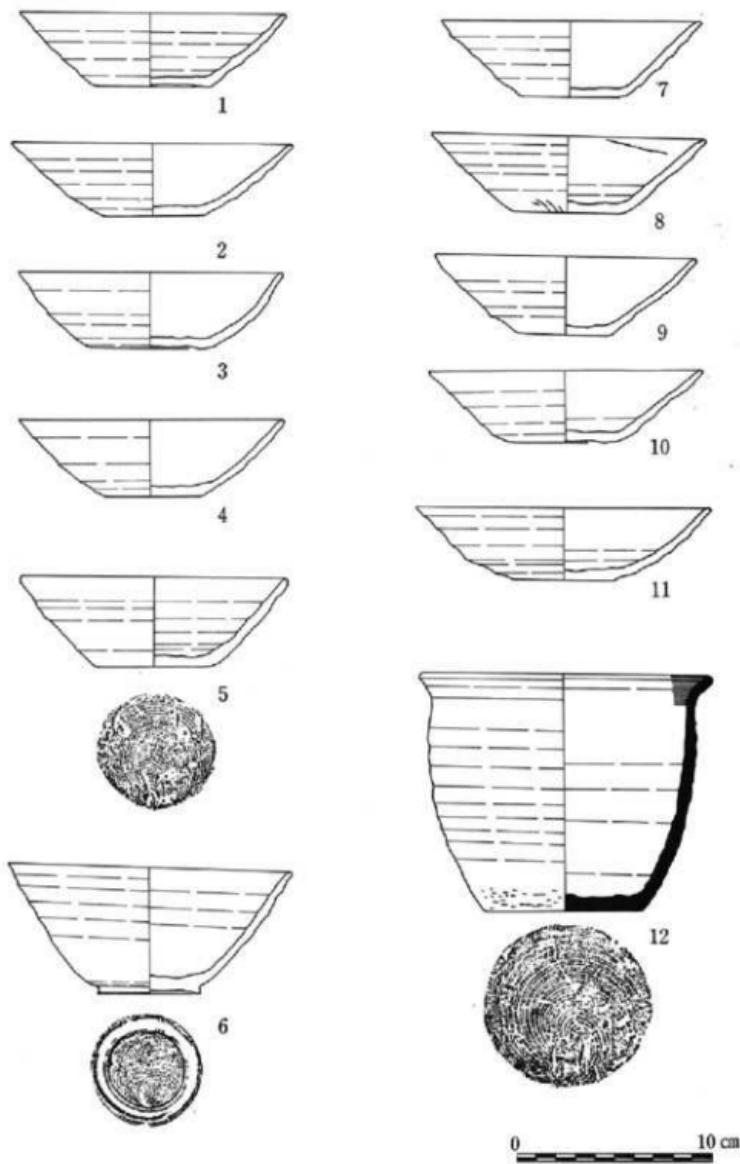
玉虫沼古窯跡群は、山辺町・玉虫沼の北岸に位置する。玉虫沼の縁辺を東西に連なるゆるやかな丘陵の北斜面にあり、この北面する緩斜面一帯に立地する。地目は、畑・牧草地で一部雑木林・荒地である。遺跡は、戦後付近一帯の開墾に併なって発見され今まで多量の遺物が採集されているが、正式な調査は行なわれておらず現在に至っている。

山形盆地の西辺を画する出羽丘陵一帯には、大江町左沢、寒河江市平野山、同柴橋、中山町滝などの各古窯跡群があり、村山西部丘陵古窯跡群として把握される。本古窯跡群はその一支群である。遺物は丘陵の北斜面一帯に広く散布し、その範囲は南北約100m×東西約200m位である。採集された遺物は、須恵器、赤焼土器、土錐等である。須恵器(第2 図1～5、7～11)はロクロ成形、底部糸切りによる坏で、口径14cm前後、底径6cm前後である。体部は少しうねりを持ちながら外反ぎみに立上りロクロ回転方向はいずれも右廻りである。高台付坏(6)も採集されている。(12)は、ロクロ成形後酸化炎焼成を行った壺で底部は糸切りである。回転方向は右廻り。土錐(図版12-1)は長径10.5cm、短径5cmで長軸方向に径1cmの孔が縦貫する。環元炎焼成で窓内で須恵器と同時に焼成されたものと考えられる。

現在まで採集されている須恵器の坏では、口径に比べて器高は比較的低く約4cm前後にまとまる。時期的には、平安時代後半に位置付けられる。本古窯跡は、遺物の散布範囲も広く数十基からなる古窯跡群があるものと推定される。

また、玉虫沼古窯群に隣接してその北方に能中遺跡が位置する。玉虫沼古窯跡の所在する丘陵の北端部に位置しなだらかな丘陵上に立地する。地目は果樹園である。付近には径約1m前後の礎石状の石材が散見され、数棟のまとまりをもつものと考えられる。遺跡の範囲は、丘陵の北端部一帯で寺院跡の可能性がある。

貞觀8年(866年)定額寺に列せられた瑜伽寺については現在のところその所在が明確ではない。山形市滝の平・里道B遺跡がその凝定地とされているが詳細については不明である。滝の平在住の庄司哲氏によれば、玉虫沼・能中遺跡付近に“能中坊”なる坊舎があったとの伝承があると云う事である。遺跡からは同氏によって、須恵器、土師器、越前系と考えられる酸化炎焼成の中陶器片等の遺物が採集されている。



第2図 玉虫沼古窯跡出土遺物

## 2 経塚

山形盆地の西側を占める出羽丘陵地帯の、平地に望む景勝地の山頂には往々にして経塚が存在し、河北町根際経塚から山形市谷柏山経塚まで、ほぼ等距離を保って点々と分布している。今回の分布調査では、一字一石経を埋納したものも含めて5ヶ所の経塚を確認した。これらの北には寒河江市平塩経塚、南には山形市仁田ノ沢経塚がある。

山形盆地の東側、奥羽山脈の山麓ぞいには、山寺立石寺や天童市若松寺など天台宗系の古寺が多いが、西側の出羽丘陵一帯には、山形市滝ノ山観音寺や瑜伽寺、平塩寺をはじめ真言宗系の古代寺院が多く平安時代から中世にかけて、この地域は主として真言宗が弘通したと言われている。

### (1) 滝経塚

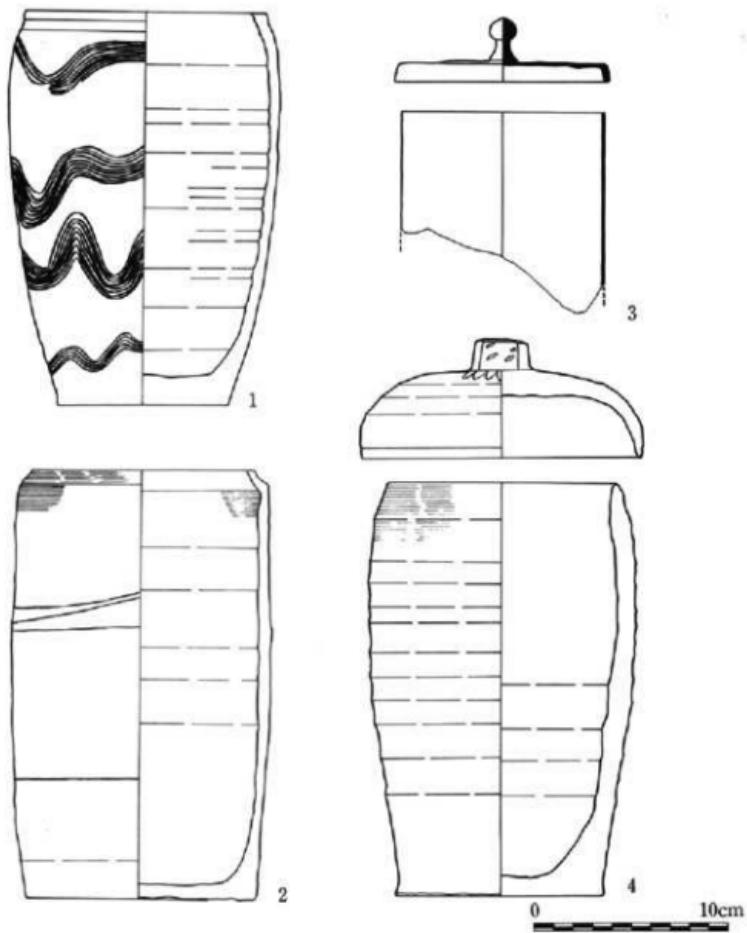
中山町大字土橋字滝に所在する。昭和52年9月に土砂採取によって発見された。この地は「経塚」の地名があり豊田山と呼ばれている。工事中の偶然の発見であるため内部構造等は不明であるが、小高い丘陵の頂上に立地し特に顯著墳土はなかったようである(注1)。発見当時、すでに甕や壺、經筒などの破片が散乱し經筒内から紙が付着した軸木が23本検出された。1本の軸木に付着した和紙には法華経を朱書きしたものが確認された。1本の軸木に5枚の紙が巻きつけてあり、それが23巻あったと推定される。軸木は丸棒状に削られ長さ17~18cm、径1.5~2cmを計る。

經筒(第3図3)は蓋と筒上半部のみである。銅鋳製で発錆著しい。蓋は径11cmで宝珠形のつまみをもつかぶせ蓋で、石田茂作氏の分類によれば平蓋に属する(注2)。重圓文が施されている。筒身は円筒形で下半部が欠損する。径10.4cmで村山市河島山経塚出土の經筒に類似するが、盛り蓋式の蓋に若干の相異が見られるので大きさはほぼ同じである。これと比較して蓋と共に総高23.5cm位と推定される。

經筒と併出した四耳壺は、口頸部から肩部にかけての大形破片で柴灰色を呈し口頸部に横ナデが認められる。肩部に8の字を横にしたような中空で上下貫通する耳が4ヶ所に貼付されその下部に櫛描波状文が認められる。最大径約20cm前後の珠州焼系の壺である。

大甕は小破片のため全様は不明であるが胴部に比較的粗い条線状叩目が右下に施され珠州焼系の甕で内面に円形の押圧具のあて痕がみられる。

時期的には、經筒蓋のつまみとなっている宝珠の形や四耳壺の形態から推定して、13世紀の鎌倉時代初期頃に位置付けられる。



1. 2 善廣寺經塚  
3. 通經塚  
4. 安國寺裏山經塚

第3図 経塚出土遺物（1）

## (2) 安国寺裏山経塚

山辺町大字寺に所在する安国寺は、延文4年（1359年）斯波兼頼が夢窓疎石を開基として開いたと伝えられる寺院で、当時南朝に対する戦略的な役割を果した寺でもある。

経塚出土地点はその背後の山（標高224m）の山頂平坦部で経筒が安国寺に保管されている。出土地点の現況は、塚の痕跡が残っており径約6m、高さ50cmの円墳状をなし中央部がくぼんで疎石が散乱している。

出土遺物は、つまみを有する蓋を伴う陶製経筒（第3図4）である。経筒は珠洲焼系で高さ21.7cm、口径12.5cm、底径11.2cmを計り底部は厚く底面は静止糸切りである。底部より僅かに外側に開きつつ口縁部近くで内湾する。表裏ともくろ目が著しい。蓋は楕形をなし中央に四隅面取りをした四角形のつまみが付き、つまみの側面に非常に細かな蓮華様のものが針書によって描かれている。蓋は筒身と接する部分の径14.8cm、高さ6cmを計り、つまみのある中央部よりなだらかな曲線をえがいて経筒口縁部にかぶさる。

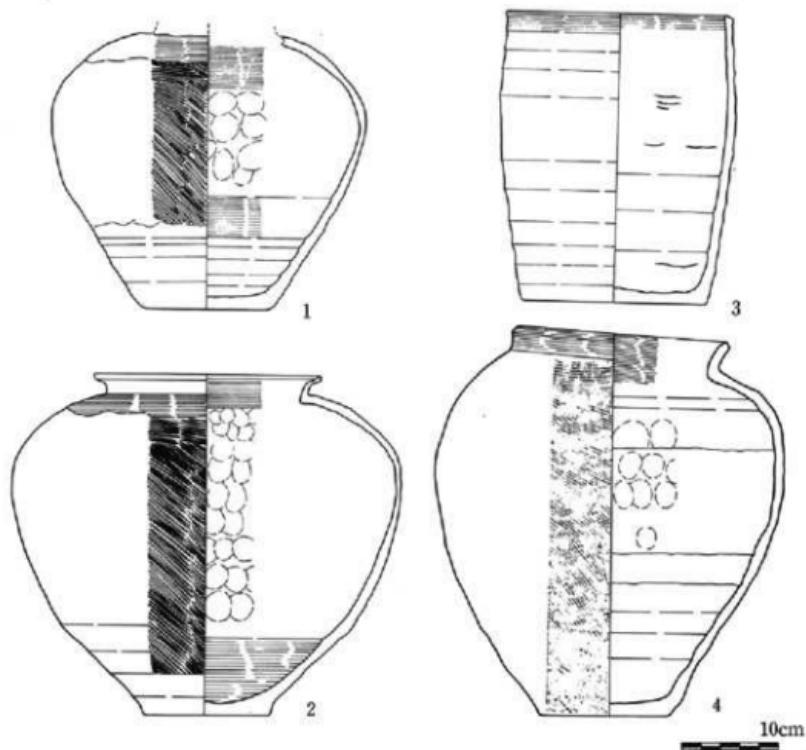
経筒内部より炭化した紙断片やめのうの小石が検出され寺に仏舎利として保管されている。時期的には、陶製経筒の口縁部が内湾する形態や蓋のつまみのつくり等から14世紀中葉に位置付けられ安国寺の開基と前後して造営された経塚遺物と推定される。

## (3) 普広寺山経塚

普広寺は山辺町大字根際にあり、応永年間の開基と伝えられる曹洞宗の寺院であるが、もとは密教系の寺院であったという。その裏山（標高240m）の山頂から昭和7・8年に多くの経塚遺物が発見された。現在5点の陶製経筒と外容器が寺に保管されてあるが、発見当初、銅製経筒3個と蓋として用いられた松喰鶴鏡があったといわれるが、戦前中に紛失し現存しない（注3）。

経筒は3点ありいずれも陶製である。（第4図1）は、灰黒色又は暗紫色を呈し高さ20cm、口径12.2cm、底径8.9cmを計る。底部からわずかに外に開きながら上部で内にすぼまり蓋受けが造り出されている。器表に口縁部から底部にかけて4段の鋪櫛描波状文が施され内外面ともロクロ目が著しい。（第4図2）は円筒形、灰白色を呈し高さ22cm、口径11.4cm、底径12cmを計る。口唇部は内傾して蓋受けになる。全面にくろなどがあり口縁部に横ナデが施される。底部は整形後剝落し切り離しは不明である。（第4図3）は円筒形をなすが外筒のようである。高さ29.5cm、口径22.7cm、底径18.8cmを計り灰白色を呈する。底部切り離しは窓で行った痕跡があり底部の立上り付近に回転範削りを行ない全面にロクロなでが認められる。口縁部に横ナデを施す。

外容器は2点あり（第4図1）は口縁部を欠損する。現高28cm、最大径32cm、底径12.



1. 2. 3. 興廣寺經塚  
4. 労沢經塚

第4図 経塚出土遺物（2）

5 cmを計る。灰白色又は灰黒色を呈し器表に口縁部から肩部に黄緑色の灰釉がかかる。肩部より下位に右下りの斜行条線状叩目が密に施され内面に円形の押圧痕が認められる。

(第4図2)は、器高37 cm、口径23 cm、最大径40 cm、底径13 cmを計る。口縁部に緑色の灰釉がかかり肩部から胴部下半に横位から斜位の細かな条線状叩目が密に施され内面に円形の押圧痕が認められる。底部は砂が付着し、輪積みの痕跡が明瞭である。

以上の陶製外容器と経筒は須恵器の製作技法を踏襲した珠系の陶質土器で、外容器は胴部が大きくふくらみ器表に細かで密な条線状叩目が施され肩部まで自然釉が流れている。時期的には、以前銅製経筒や松喰鶴鏡が出土したと伝えられており、平安時代末葉に遡る

可能性がつよく 12世紀後半から 13世紀初頭にいたる時期が想定される。

#### (4) 普広寺境内経塚

普広寺境内の北側に位置し庫裡の裏に所在する市村家墓地の前のいちょうの木付近から砾石に一字ずつ墨書きした経石が多数出土した。近世の六字一石経塚である。

#### (5) 芳沢経塚

遺跡は、山形市芳沢落北文の峯の突端部に立地する。山頂の平坦部に「おきょうづか」と呼ばれる小円墳があり砾石中から甕が出土したという。甕を載せた平石と、それをおおった平石が残っている。経筒については不明である。

(第4図4)は、高さ39.6cm、口径21cm、最大径36cm、底径12.2cmを計る珠洲焼系の甕で、山形市立大曾根小学校に保管される。灰黒色を呈し、肩部横位、それ以下右下りの条線状叩目による打圧痕がある。上下3cm、左右6cm位が単位である。内面に円形アテ具による押圧痕が認められる。口縁部は外に開き口唇部は斜めに削られている。底部は静止糸切りで胴部は、7段にわたる継目跡が認められる。

時期的には、口縁部のつくりや胴部のふくらみの状態より 13世紀後半から 14世紀頭に位置付けられると推定される(5)。

註1 柏倉亮吉氏が発見当初、中山町からの連絡で始めに現地調査を行った。詳細は、町報「なかやま」282号(昭和53年2月)に載っている。

註2 石田茂作『雄山閣考古学講座』所収 1927年

註3 川崎浩良「本県内の経筒」『出羽文化史料』所収 1947年  
武田泰造「山辺町郷土概史」 1975年

註4 川崎利夫・佐藤慎宏「山形県の中世陶器について」『山形史学研究』第13・14合併号所収 1978年

註5 平石に神代の繪文字が刻まれているという説がある。石川憲保『日本神話の復原と古代国家』1970年繪文様は出土後に偽刻されたものと考えられる。

### 3 村木沢古墳群

村木沢古墳群は、山形市村木沢部落の西方にある丘陵に立地する。山形市立村木沢小学校の西方約400mにあり。平野部から丘陵へ移行する傾斜変換線付近は、白鷹丘陵の末端が平野部に突出し丘陵から流下する小河川が数条あり谷が樹枝状に深く入りこんでいる。本古墳群は、この平野部に突出した丘陵の山頂から東斜面一帯にかけて分布する。丘陵はなだらかな起伏をもち地目はブドウ畠である。東方の水田面からの比高は丘陵の山頂部で約40mである。

今回の分布調査で確認された古墳は4基で、丘陵の山頂部付近と東斜面の高まりを利用し営まれている。付近にも墳丘状の高まりが数ヶ所認められるが、ブドウ畠開墾に伴なう削平によって確認するまでには至っていない。規模はいずれも径約10m、高さ1.5mで墳形は円墳である。また付近に点々と石棺の一部と考えられる石材が散乱している。石材は、板状の石英安山岩で、開墾が地表の比較的浅い所でとどまっていることから石棺の蓋石と考えられる。

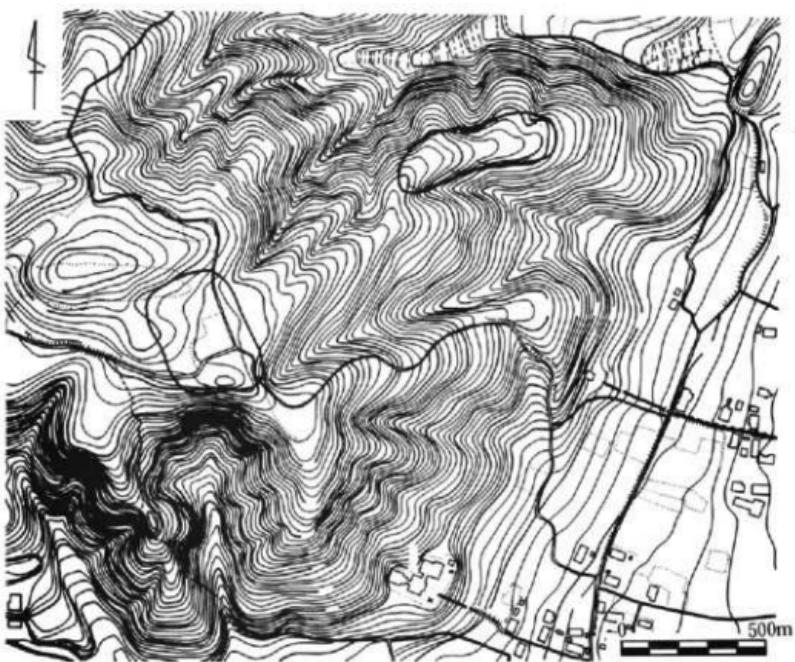
### 4 坊主窪古墳群 塙の森古墳群

坊主窪古墳群は、山辺町大字大寺に所在し熊沢部落西方に位置する丘陵に立地する。丘陵はなだらかな起伏をもち標高220mを計る。丘陵は、平野部に突出し、その北方に白鷹丘陵から東流する河川が流下し谷を刻んでいる。古墳はこの丘陵の山頂部と東斜面一帯に分布し、地目はブドウ畠である。

付近は、以前四十八森とも呼ばれ50基あまりの大規模な群集墳があったと言われている。昭和18年山辺町郷土史研究会によって3基の古墳が調査されているが、すでに石棺の石材が散乱し須恵器の破片が若干出土したということであった。また開墾に伴なって車塚と呼ばれていた古墳から滑石製の管玉、勾玉が出土したというが、その遺物の所在については不明である（註1）。

今回の調査で確認された古墳は3基ほどで、径約15mを計り墳形は円墳である。付近にも墳丘状の高まりが2～3基確認されるが開墾時に相当数の古墳が削平されたものと考えられる。

塙の森古墳群は、坊主窪古墳群の所在する丘陵山頂部から東方へ派生する丘陵の先端部付近に立地する。東方の水田面からの比高は約40mでゆるやかな東面する緩斜面に分布する。距離的には、坊主窪古墳群の東方約500mにあり同一丘陵上に位置し分布からみて付近一帯を包括した一支群として把握される。今回の調査では、開墾時の削平等によって、明瞭な墳丘は確認されなかった。



第5図 坊主塚・塙の森古墳群 地形図

註1 武田泰造「山辺町郷土歴史」 1975年

### 5 要害墳墓

要害墳墓は、山辺町大字要害に所在し県道の北方、送電線鉄塔付近に位置する。盆地に張り出した丘陵の東斜面に2基の円墳があり地目は雑木林である。丘陵の北方は小河川が東流し谷を刻んでいる。墳丘は、この谷へ落ちる斜面の傾斜変換線付近にあり、東斜面にそって2基が並んでいる。

一基は、径約1.5m、高さ1.5mを計り、もう一基は径約20m、高さ0.7mである。墳頂部付近が掘り込まれてあるが、墳丘は比較的よく残っており周囲に溝状の凹みが認められ全周する。遺跡地名表では、鎌倉時代の墳墓とされているが、当該期の墳墓としては規模が大きく古墳の可能性をもつものと推測される。

## V まとめ

分布調査は、昭和53年9月19日から10月6日にかけて主に山形市、山辺町、中山町にわたる西部丘陵地域について実施した。その結果、前述した様に57の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)が確認された。遺跡は、平野部に望む丘陵末端の緩斜面や山麓の低台地に多く分布する。これらは、平野部に所在する各遺跡との関連を考える上で重要な遺跡である。この地域では、調査区域内に5ヶ所の経塚が確認された。年代的には、根際普広寺山経塚(12世紀末葉)一滝経塚(13世紀)一芳沢経塚(13世紀後半)一安国寺裏山経塚(14世紀中葉)一普広寺境内経塚(18世紀)とすることができる。近世の普広寺境内境塚は別として、13世紀を中心に営まれた4つの経塚は、平野部を望む山頂などの景勝地を選んで営まれ、それらが山形盆地の西側に点々と同距離を保って分布することは注目される。また、山形市村木沢古墳群、山辺町坊主窪古墳群など、調査地域内に4ヶ所の古墳群が確認された。これらは現在まで正式な調査はほとんど行なわれておらず現在に至っている。今まで開墾などに伴ない相当数の古墳が削平されていると考えられるが、いずれも古墳時代末期の群集墳で、時期的には7世紀後半から8世紀初頭に位置付けられる。山形盆地の西縁部に、山形市谷柏古墳群、同中林山古墳など一連の分布が認められ平野部に所在する当該期の集落との関連を追求するうえでの重要な地域である。

山間部にある遺跡の多くは、山辺町畠谷周辺に集中している。この地域は、山間部の小盆地状を呈し、遺跡はこの盆地に張り出した丘陵上の平坦陵面や山麓部の緩斜面に多く分布する。縄文時代の遺跡は、山間部の畠地・荒地が多くその散布範囲を明確にし難いものがある。時期的には、縄文時代中期の遺跡が多く、山辺町大字北作に所在する薬田石遺跡などは比較的大規模な遺跡で、弥生時代、古墳時代にわたる遺物も採集されており長期にわたる集落跡と考えられる。

また、『三代実録』貞觀8年9月8日の条にみられる瑜伽寺ぬについては、以前より山形市滝の平にその凝定地をあてているが、山辺町玉虫沼付近に所在する能中遺跡は、礎石様の石材が認められ、その所在については今後の課題といえる。

今回の分布調査で確認された遺跡は57遺跡であるが、時期的に占める割合は、縄文期36%、弥生時代4%、古墳・奈良・平安時代30%、中世21%、近世9%となり一応の分布上の傾向がうかがわれる。

## 参考文献

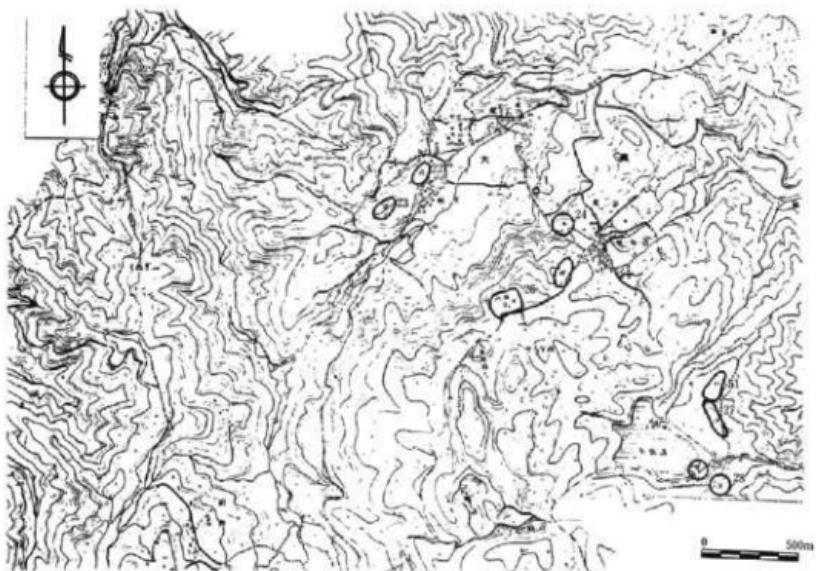
- ① 川崎浩良「本県内の経筒」『出羽文化史料』所収 1947 年
- ② 柏倉亮吉「山形県の古墳」山形県文化財調査報告書 4 1953 年
- ③ 川崎浩良「山形西郊郷土文化」羽陽文化 32 1956 年
- ④ 山辺町文化財保護研究会「山形県東村山郡山辺町大塚土師遺跡の調査略報」  
山形考古 6 1960 年
- ⑤ 柏倉亮吉「東北地方の條里制—山形県の場合」古代文化 7-4 1961 年
- ⑥ 川崎利夫「山形県の経塚について」歴史考古 12 1964 年
- ⑦ 赤塚長一郎「山形県山辺町大塚土師遺跡の報告」山大史学（復刊 1） 1964 年
- ⑧ 山形県「山形県史・考古資料」 1969 年
- ⑨ 武田泰造「山辺町郷土概史」1975 年
- ⑩ 山形市「山形市史・上巻」 1973 年
- ⑪ 川崎利夫・佐藤徳宏「山形県内の中世陶器について」山形史学研究第 13・14 合併号  
1978 年



第6図 国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（1）



第7図 国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（2）



第8図 国営農地開発・山形西部地区関係遺跡分布図（3）



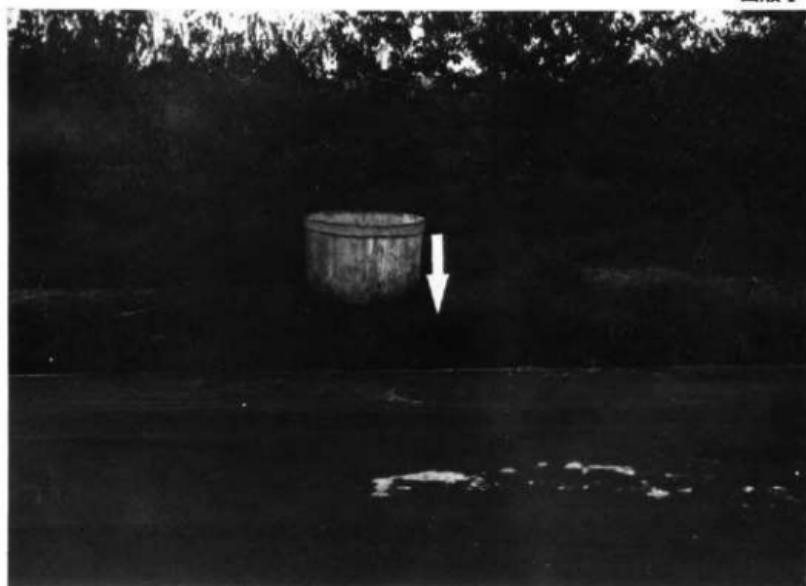
第9図 国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（4）



第10図 国営農地開発事業・山形西部地区関係遺跡分布図（5）

# 図 版

圖版 1



圖一-2 古窯跡近景



測量探近景



山柄遺跡近景



西光山館跡近景



坊主庵古墳近景



安國寺裏山經塚遠景



横際的場遺跡近景



塙の森墳墓遺跡



要害填塞近景



小針生道路近景



柳山古墳近景



柳山古跡遠景

圖版 7



蓬沢遺跡近景



高田石造跡近景



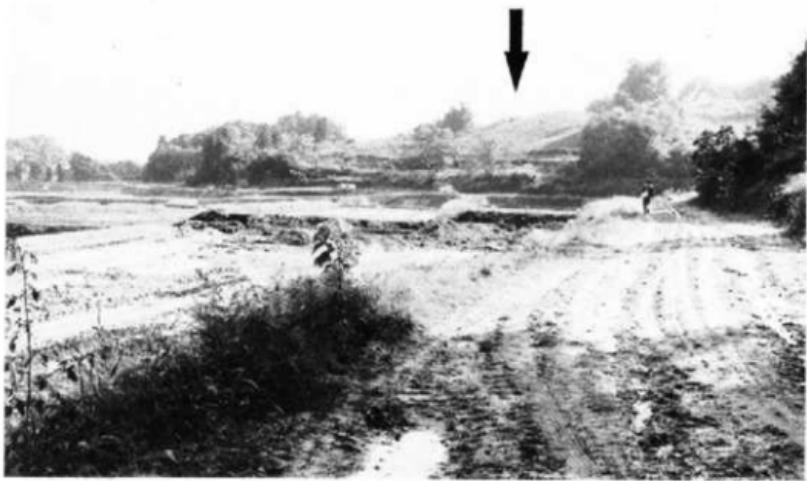
高内所入道路近景



畠谷城跡遠景



鎌坂塚跡遠景



村木沢古墳群遠景



村木沢古墳群近景



芳沢経塚遠景

図版 11



秀沢縄等近景



上平遺跡近景



1



2



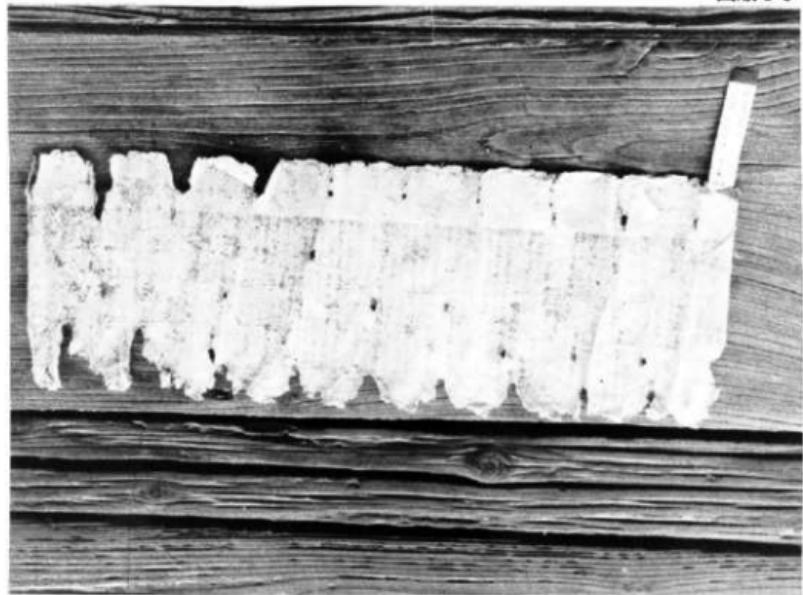
3



4

玉虫沼古窯跡出土遺物  
墨道窯跡出土遺物

上平遺跡出土遺物  
西光山窯跡出土遺物



海経塚出土経巻



栗田石出土遺物



经塚出土遗物

- |           |         |
|-----------|---------|
| 1 安国寺裏山経塚 | 4 曹広寺経塚 |
| 2 曹広寺経塚   | 5 曹広寺経塚 |
| 3 芳沢経塚    | 6 曹広寺経塚 |

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第19集

分布調査報告書(6)

国営農地開発事業関係遺跡

——山形西部地区——

昭和54年3月28日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社大風印刷

山形市あこや町1-4-3 TEL31-5575#9

---